

## N14b J. Bayer「Uranometria」による突発天体の探査

井上 法子、平井 正則 (福岡教育大)、藤原 智子 (九州大・理)

写真技術を使った恒星の測光観測が始まったのは、今から100年余り前の事で、それ以前の天体の位置や明るさ現象は全て星表や星図などの形でしか残されていない。そしてこの様な歴史的天文書の調査は天体の過去の姿を知ることが出来る唯一の手段である。特に恒星の長期的変動や稀にしか起こらない超新星爆発など、突発天体の記録は恒星進化の理解に非常に重要なデータを提供する。

我々は、歴史的天文書の一つとして1603年に出版されたJ. Bayerの「Uranometria」の星図を使って突発天体の探査を試みた。49枚の星図には60星座に属する1500余りの天体が当時の肉眼観測の結果として記録されている。現代星図との比較により、21天体が対応する恒星が見つからない記録であることを発見した。これらの中には超新星であると考えられる記録も含まれる。

これらの未同定天体の物理的性質を詳細に調べるための基礎データとして、Uranometriaに於ける天体の位置精度について検討した。記録された天体のうち、Bayerが同定した星について、星図上の位置(黄経・黄緯)を測定し、誤差を算出した。その結果、位置は比較的高い精度であることが分かった。

本講演では、Uranometriaに記録された天体の位置精度と共に検出された21の未同定天体の特性について報告し、突発天体である可能性も議論する。